



幼い夢と

清岡卓行



幼い夢と

清岡卓行

河出書房新社

詩集 幼い夢と

昭和五十七年四月二十日 初版印刷
昭和五十七年四月二十五日 初版発行

著者 清岡卓行

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―一二〇―(営業)
四〇四―八六一―(編集)

振替口座(東京)〇―一〇八〇二

印刷 多田印刷株式会社

製本 小泉製本株式会社

©1982 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

清岡卓行(きよおかたかゆき)
大正十一年、大連に生まれる。
昭和二十六年、東大仏文科卒。
詩集に『氷った焰』『日常』
『固い芽』『駱駝のうえの音楽』
『西へ』など。
昭和四十五年、小説「アカシヤ
の大連」で芥川賞を受賞する。
小説に五部作『アカシヤの大連』
『花の躁鬱』『海の瞳』『邯鄲の
庭』『夢のソナチネ』など。
昭和五十四年、中国紀行『藝術
的な握手』で読売文学賞を受賞
する。ほかに評論と随想がそれ
ぞれ数冊ある。

目次

半世紀ほどの差

生後二週間

知命を過ぎて

鏡

ひとみしり

かける —ある恐い夢—

しきりのガラス

小さな別れ

散歩へ

ひきがえる

蝸牛の道

邯鄲

シャボン玉

天国とお墓

遠浅の海で

6

8

12

14

22

24

26

28

34

36

38

44

48

父の日

乗れた自転車

アルバムから

風揚げ

庭のまぼろし

丘のうえの入学式

駅名あそび

いつまで

恐竜展で

球あそび

秋深く

一年と一瞬

あとがき

123

116

114

108

100

94

88

82

76

70

64

58

52

装幀 安野光雅

詩集
幼い夢と

半世紀ほどの差

生後二週間

乳呑児の無防備が わたしの頑固な心を溶かす。
抱いていっしょに 小さなフーガを聞くと
まだ明暗しか見ない目が 美しく緊張する。
わたしは仕事を忘れ 早春の一日がまた暮れる。

知命を過ぎて

米のめしを咀嚼しながら　つい目を閉じる
無念無想の修行ではない　変な癖ができた。
赤ん坊のとき母の乳を　吸いながら眠った
今は遠すぎる優しさを　思い出したいのか？

鏡

春 紫に

木蓮の花が咲くころ

嬰兒は若い母に抱かれ

生まれてはじめて

鏡のなかの自分を見た。

おお

澄みきって ふしぎそうに

視つめあう 眼と眼。

その対面を 横から

眺める母の

ちよっと いたずらっぽくもある

期待の喜びには

独立しはじめる幼い人格への
微かな畏れも。

梅雨がつづき

ほの暗い鏡のなかには

いつも同じ小さな顔。

そこにしか浮かばぬ 小さな

げんそうな

口に涎の顔。

嬰兒はあるとき その面影に

くるりとはげしく顔を背けた。

ひよめくその頭を

母はやさしくそつと撫で

ゆつくりと名前を呼んだ。

鏡のなかになお残る

密かなドラマの後髪を
ちらりと眺めながら。

夏 熱帯夜が

雄鳩の低い鳴声で明けるころ
腹掛に襦袢だけの嬰兒は
鏡の国に興味をいだいた。

そのなかの自分に触ろうと

くりかえし くりかえし

柔らかく小さな手を伸ばしたが

見えない壁がさえぎった。

嬰兒は なかば諦めるように

なかば面白がるように

指先でまあるく撫でた

固く透明なその謎を。

誘って拒む

表面の解きがたい謎を。

秋 邯鄲かんたんの声が

さびしく冴えるころ

嬰兒は鏡のなかの自分に向かい
ふと 無心に笑う。

相手の笑いが 新しい笑いを誘う。
開かれた口の齒は二本。

母は 鏡の奥に見える

楓や山茶花さざんかの涼しげな庭に

嬰兒といっしょに入って行きたい。

現在がそのまま

思い出に氷ったような

涯もなく遠い庭で いつまでも

いつまでも

いとし子を抱いていたい。

ひとみしり

門齒が二本　のぞきはじめて嬰兒

床屋歸りの父を見て　わっと泣きだす。

おお　見知らぬ　無作法な伊達男

短い髪　つるつるの頬　安っぽい香水。

笑顔と言葉で　父はあやすが　だめ。

抱いて頬ずり　せまい家をぐるぐる

いつもの遊びの 天路一周をする
涙を舌で 拭きとってやりながら。

壁の絵に触り 鏡は避け 木琴の唄
鉢植の花を嗅ぎ そして用もなく
音高く 便器の水を流したりして。

嬰兒はやっと黙るが 蓬髪と無精髭の
あの父に似た このへんな男はだれだ？
また顔を眺めて わっと泣きだす。

かける

——ある恐い夢——

私の家の赤ん坊は生後十か月ほどで、まだ言葉をしゃべらない。なにかを指示するたつた一つの単語もまだ言わない。それで、私が町の中をひとり歩いていたりするとき、ふと頭の中に甦ってくる赤ん坊の可愛らしい声は、文字には正確に写し取れないところの、意味をなさない、ただしある繰返しをともなうて意味への接近を告げている、ふしぎに懐かしい発音である。

たとえば、彼は仰向けに寝て母親におしめを代えてもらうとき、気持よさそうに喉を鳴らすことがある。グルルルのように聞えたり、ゴロロロのように聞えたりする。

口に入れようとした玩具の超小型の自動車を、不意に取り上げられるなどして、少し怒ったときは、強く閉じた唇から息を吹き出すような声を出すことがある。プフフフのように聞えたり、プファファファのように聞えたりする。

庭の木の枝から小鳥が飛び去るなど、なにか興味のある変化を知覚したときは、ター、